

「何がしたいの？（旧題：嗤い者）」

—二稿—

2024/12/17

脚本 太郎

〈人物表〉

木原 春人 (14) 中学二年生。

木原 麻子 (40) 主婦。春人の母。

淀川 文夏 (14) 中学二年生。

〈ログライン〉

母からの過干渉が原因で自分がない木原春人が、子犬を見殺しにしてしまったことにより、母からの電話を無視して犬を保健所に届ける道を選ぶ。

〈ねらい〉

- ・抑圧された主人公を書く。

1. 木原家・リビング(夕)

家具、調度品、衣類など、全てが整えられた部屋。

木原麻子(40)、腕時計を見ながら足踏み。苛々した様子。

麻子 「まったくどこほつつき歩いてんだかあの子ったら」

麻子、メジャーをポケットから取り出して部屋中を測り始める。

春人の声 「ただいま」

麻子 「遅い」

2. 木原家・玄関(夕)

玄関口に立つ学生服姿の木原春人(14)。

麻子、ドアから早歩きで春人に向かっていく。

麻子 「春人、遅いわよ。今日7時から塾だつて分かってるでしょ？ 時間の観念がないの？」

春人、委縮した様子。

春人 「ごめんなさい」

麻子 「もう謝るとか良いから。とにかく早く準備して」

春人、靴を脱いで玄関に上がる。

麻子 「ああもうもうもう靴脱ぐのものんびりなんだからこのっ子つてばもうもうもう」

麻子、手を叩きながら春人を追い立てるようにリビングへ向かう。

麻子 「ほら急いで急いで。ただでさえ成績落ちてくるんだから、その上時間くらい守れないとおしまいよ?」

3. 木原家・リビング(夕)

制服を掛けたハンガーがラック吊られている。

麻子、メジャーをハンガーに当てる。

麻子 「何度も言ってるじゃない真ん中に掛けてよって。何でこんなのもできないの?」

木原 「ごめんなさい」

麻子 「謝るとか良いから。早く行って」

4. 木原家・玄関先(夕)

春人、外へ歩いていく。

麻子、開いた玄関ドアに身体をもたせかけている。

麻子 「(一気にくましくしたてるように)塾7時からだからね？」

でも10分前には着くようにね？ 近いから大丈夫だと思

うけど。寄り道しちゃうだめよ？ ちゃんといつも

で行くようにね？ あと先生の言うことちゃんと聞きな

さいね？ 分かった？ え、聞いている？」

春人、立ち止まって振り返る。

春人 「聞いているよ」

麻子 「立ち止まってないで早く行って」

春人、歩みを再開する。

春人 「(小声で)何が正解なんだろう」

5. 路上(夕)

片側一車線だが、やや道幅が広めの道路。

車の通行量が多いが、人通りは少ない。

春人が路肩をトボトボと歩いている。

前方に淀川が立っていて、明後日の方向をじっと見ている。

春人、淀川に気付く。

やがて彼女の近くで止まる。

春人 「淀川さん」

淀川 「ああ木原くん」

淀川、一瞬だけ春人を見ると、またすぐ明後日の方
向に視線を戻す。

春人 「何してんの？ こんなところで」

淀川、興味なさそうに春人に視線を向ける。

淀川 「邪魔だからどいてくれる？」

淀川、春人の肩に触れて立ち位置をずらす。

春人 「え、何？」

淀川 「微妙に見にくい」

言った後すぐ視線を元に戻す

春人、淀川の視線を追う。

道路の真ん中に腹部から血を流した瀕死の小型犬が倒れている。

春人 「うわっ、え何あれ」

淀川 「何って犬でしょ」

春人 「いやそれは分かるけど……ヤバいでしょあれ」

淀川、嬉しそうに微笑んで、

淀川 「ヤバイよね」

春人、周りを見回す。

春人 「何だよ、誰も助けられないのかよ」

淀川 「まあそんなもんなんじゃない？ ……もしくは誰も気づいてないとか」

犬の身体に走行中の車のタイヤがかかる。

犬が小さく悲鳴を上げる。

呼応するように淀川が楽しげな笑い声をあげる。

春人 「て、てか君も、何突っ立って見てんだよ？」

淀川 「別に。暇潰しですけど」

春人 「いやそういうことじゃなくて……良くないでしょ。こんなの」

淀川 「良いじゃん。面白いし」

春人 「面白いもんかよ。早く、助けないと」

淀川 「そう？ 君つまんないね。まあお好きに」

春人 「……何なんだよ」

淀川 「まあまあこっちの台詞だけど」

春人、悩まし気に唸ると、

春人 「いや、だって……助けるでしょ、普通、誰かしら。そうするべきじゃ、ないの？ この状況」

淀川、訝し気に春人を見ている。

春人、辺りを見回す。他に人はいない。

続けるように淀川を再び見る。

春人 「……え？ あれ？ 普通そうじゃないの？」

淀川 「何をわたしに伺ってんの？」

春人 「え？」

淀川 「何がしたいの？ 言ってる間にさっさと助けに行けばいいじゃない」

春人 「いや、でも……車多くて危ないし……それに……」

春人、腕時計と犬を見比べる。

淀川 「馬鹿みたい」

春人、スマホを取り出す。

春人 「こういう場合、通報とかってして良いのかな……えと、110と119、どっちに掛ければ良いんだろ……」

春人、スマホで検索し始める。

春人 「いや、保健所かな？」

淀川 「そんなの調べてる間にどれかに電話すれば」

春人 「え？ ……いやでも、違ったら迷惑だろうし」

淀川 「迷惑？」

春人を見て、少し驚いた様子で鼻で笑う

淀川 「命と迷惑で迷惑が勝つんだ？」

淀川、嘲笑の表情になる。

淀川 「君が恥ずかしいってだけでしょ」

春人、言葉に詰まる。

淀川、再び犬の方を向く。

期待の色にその目が染まる。

淀川 「おおっ」

春人 「うわっ」

車が犬を轢き飛ばす。

血が道路に飛び散る。

車のブレーキ音。

淀川、事態を面白がる野次馬の表情で犬の死体を見

ている。

春人、悲し気な表情で茫然と犬の死体を見ている。

犬を轢いた車が走り去っていく。

6. 保健所・駐車場

駐車場にはまばらに車が停まっている。

保健所の建物は三階建てくらい。

春人が犬の死体を抱いて、駐車場を突っ切って保健

所の正面玄関へ向かっていく。

正面玄関の上には「〇〇市保健所」と書かれた看板

がある。

スマホの着信音が鳴る。

春人が僅かな間立ち止まる。

また歩き出す。

着信音は鳴り続けている。

終